



TITLE:

結核・胸部疾患研究の将来: 第 24 回国立大学研究所結核胸部疾患談話会での討議に寄せて

AUTHOR(S):

前川, 暢夫

CITATION:

前川, 暢夫. 結核・胸部疾患研究の将来: 第 24 回国立大学研究所結核胸部疾患談話会での討議に寄せて. 京都大学結核胸部疾患研究所紀要 1973, 6(2): 19-20

ISSUE DATE:

1973-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/52280>

RIGHT:

結核・胸部疾患研究の将来

——第24回国立大学研究所結核胸部疾患談話会での討議に寄せて——

京都大学結核胸部疾患研究所内科1

前 川 暢 夫

本日の談話会の最後のプログラムとして「結核・胸部疾患研究の将来」という討議が組まれていて、世話人である安平教授から私に発題講演を求められたのであるが、私の考としては本日参会されている各研究所の先生方から「各自の研究をとりまく環境」について忌憚のない意見を伺うことが眼目ではなかろうかと思っている。何故ならばこの広汎な領域に関する研究の展望を述べることは、未熟な私には至難のことであるし、本来何を主要な問題とし、どのようなアプローチを考え、そしてその為どのような方法論を組立てて研究に臨むかという事こそ、研究者の生命であり、又唯一のよろこびでもあろうかと考えるからである。そして、その極く一端を本日の談話会に於て先生方の講演で示して頂いたわけである。Variety に富んだ講演を伺って、勿論各主題に対して均等に十分な理解を持ったとは申せないが、それぞれが背景に大学の、或は研究所の置かれている現状と各研究者の研究自体に関する反省ならびに未来像を含んでいるものと考えられるわけである。

従つて、私は私共の研究をとりまくもろもろの環境条件を卒直に認識し、それらを分析した上で問題意識を整理する所から将来に対する展望が開けて来ると思われるし、それが研究の自由と社会的意義といった問題にも関連して来ると考える。

例えば、昭和16年に当時の社会的要請に基づいて創立された私共の京都大学結核研究所は、昭和42年6月に京都大学結核胸部疾患研究所と改称されたが、それより以前に東京大学伝染病研究所は東京大学医科学研究所に、又金沢大

学結核研究所は金沢大学癌研究所にそれぞれ改称されている。これにはそれぞれの研究所に於て研究を担っている方々の意向が、直接間接に反映されているものと考えられるが、同時に各研究所の立地条件や規模、さらには附置された大学の関連の深い学部との関係が、このような方向性に大きな影響力を有していると思われるのである。

このなかに私共の研究を支える研究費の問題、技術者を含めた人の問題、研究者の交流の問題、及び特定の設備や能力の共同利用の問題等が存在するであろうし、研究の効率を上げる為の情報処理も亦大きな問題の一つであろう。

以上、私は「私共の研究をとりまく環境」に関する検討が本日の討議の基底の一つとして重要であろうと考え、二三の問題点を指摘したつもりであるが、具体的に「結核及び胸部疾患研究の将来」を論ずることは最初に述べたように誠に困難である。

我国における結核研究の歴史を考えると、多くのすぐれた研究者が集中したと並んで幾つかの共同研究組織が全国的な規模で持たれ、基礎から臨床の広い範囲にわたって、即ち疫学、管理、菌体成分とその組織反応、薬剤耐性、化学療法効果の判定規準とその評価、更に難治化の要因等の諸問題に関して多くのすぐれた成果を上げて来た事は周知の如くであって、その体系はそのまま慢性疾患研究の一つの Model と言っても差支えない。

勿論、現在でも結核の研究に問題点がないわけではなく、結核菌の薬剤耐性獲得の機序を大腸菌その他の一般細菌と同じように考えてよい

かと言ふような基礎的な問題から、臨床的に排菌を認めない結核患者の活動性をどのようにして診断するか、或は生体内で Eradication という事は可能であろうか等、種々の難題が私共の目前にあるわけであるが、最近の結核研究のなかで最も注目される動きの一つは IUAT, WHO 及び Canada, Czechoslovakia, Netherland, Norway の4カ国が共同で組織した Tuberculosis Surveillance Research Unit (TSRU, Research Director: Dr. K. Styblo) であつて、いわば macroscopical に結核の過去及び現在の分析から将来の Annual Risk や Prevalence を予測し、或は High-risk Group の検討から Incidence を低下させる要因を見出して行こうとする疫学及び管理の研究集団で、結核に関する先進国の手で肺結核症をいわば総括する方法乃至因子を探索しようとするもののようである。

これが又、遠からずアジア、アフリカその他の開発途上国での結核対策に対して大きな指標を提供するであろう。

目を転じて、胸部疾患一般について考えると余りにもその場は広く、Etiology 不明の疾患がかなり沢山存在する。肺癌、気管支喘息、サルコイドーシスという風に並べてみても、主として肺に原発するもの、神経支配乃至心因性に関する要因が大きいと考えられるもの、或は免疫不全を含む Systemic Disease といった風に一つ一つが多くの難かしい問題を含んでいる。細菌学的な、生化学的な、病理組織学的な、種々の角度からのアプローチが多くの研究者によって精力的に行なわれて居るが、解明されない点が余りにも多いことは周知の通りである。

しかも近年次第に悪化の度を強めて来ている人間の生活環境が、最も外界の影響を直接的に受けやすい呼吸器系に一層複雑な修飾を加えるであろう事は想像に難くない。

免疫化学の領域での収獲が最近特に目立つようであるが、種々の関連領域の basic な Information を導入して、各研究者が選んだ、或はその研究グループが志向した主題に立向うことが現在の研究の姿であり、近い将来にも変ることがないのではないかと考える。

その主題が全研究所的なものでなければならぬか、或は直接「社会的な要請」といったものにどれ程かわるか、という問題は「研究はそもそもどの程度に研究者自身のものであり得るか」という点に関する根本的な認識によるものであろう。

以上、私は本日の討議の素材として私の考の概略を「問題点を並べる」という意味で述べたつもりであつて、発題講演としての責を果たしていない諸点については皆様の実質的な討議によって補って頂きたいと希望する。

尚、一言つけ加えることを許して頂くと、ここ数年来結核病学会と胸部疾患学会との関係乃至あり方について種々の論議があるが、私は具体的な両学会の運営や日程等の点は極く表層のことで、本当の問題点は学会の主体をなす研究、特に問題意識や取組み方の上の差にあるのではないかと考えるので、或はこの面からの討議が行なわれても本日の主旨には反しないのではないかと考えている。

この拙い発題を緒として活発な討議が行なわれるよう重ねて希望する。